



プラネティストが行く 3

## 技術が資源を支配する という発想への転換

中村 繁夫

写真・桃井 和馬

1983年に中国の冶金工業部（鉄部門）と有色金属工業部（非鉄部門）が合併した時に、人民大会堂で発足式典が行われた。その時に何と私が賓客として招聘されたのである。合併後、第一号のタングステンの長期取引契約のサインをすることが目的であった。今考えてみると、この日の合併式典が、中国の国家政策として、レアメタル取引のスタートの時であり、筆者自身についてもレアメタル貿易に本格的に傾倒していった原点でもあった。

あれから25年が経過し、中国は奇跡的な経済発展を果たした。そうしたなかで、世界のタングステン資源の過半を保有する中国は、国家政策の一環として、資源輸出に各種の制限を加えはじめている。その結果、タングステン市況が暴騰して、高値止まりのまま推移している。他のレアメタルも例外なく、ここ数年で4倍から5倍に値上がりしている。国際市場においても、政府の後ろ盾をもとに中国企業が異常な高値で各種レアメタルを「奪取」する光景を頻繁に目にするようになった。資源争奪において中国政府は、国内外で露骨な関与をしている。資源貧国日本にとって、この価格暴騰による「レアメタルパニック」は産業の生命線を脅かすまでになってきた。

実はその熾烈な獲得競争を、かつては日本も国家を挙げて行っていたのだ。日中戦争勃発後の1940年（昭和15年）にも、タングステンを巡るレアメタルパニックが起こった。タングステンは超硬工具や電球のフィラメントに使われるなど、現代でも代表的なレアメタルであるが、大砲の弾や、戦車や装甲車の外壁部分にも使用されていた。当然、戦時には必要不可欠であった。そのため、国際都

市上海でタングステン<sup>①</sup>の争奪戦がはじまったのである。

資源確保は軍部が調達本部となった。陸軍主導の昭和通商や海軍管轄の兎玉機関を通じて、タングステンやダイヤモンド、プラチナなどを調達した。当時の上海は国際都市で世界の金融機関やメタルトレーダー等も活動していたらしい。軍部独裁の帝国主義時代には、日本もなりふり構わぬ資源獲得競争を行っていたのである。

だから日本も強力に国家が関与すべきと言いたいわけではない（別の機会<sup>②</sup>で述べるが、中国政府主導の資源争奪は、世界中で弊害を多発させている）。むしろ、日本には資源に対する「国家戦略」がなさ過ぎることが問題なのだ。役所間の縦割り行政に興じて予算を取れば、「あとは民間で」という安易な考えが横行している。

現在進んでいるレアメタルパニックや資源開発にも、陰謀の臭いが漂い、その動きは複雑である。レアメタルは希少にして偏在しており、ハイテク産業ばかりでなく軍需産業にも関係するため、日本でも、資源貧国として獲得に向けての国家戦略は必要である。

現時点で、電子技術のレアメタル素材や部品の6割以上は、日本で生産されている。技術革新がレアメタル資源の有用性を決定付けるのである。例えば、ハイブリッドカーに使用される素材の中には、日本で使われるためだけにやってくるモノもある。これは、技術による資源獲得といえる。日本は技術立国として、新たな電子材料や機能性材料の開発を通じて、逆に資源を支配していくこと、つまり、資源を獲得していくことも可能なのだ。今、日本に必要なのは、「技術」と「資源」を共生させる国家戦略だ。これは、「本当に人類に貢献するものは、資源そのものではなく、資源を有効に利用できる先端技術ではないのか？」というプラネティズム（地球主義）の考えにも通じるものである。

① なかむら・しげお「1947年生まれ。レアメタル専門商社・アドバンストマテリアルジャパン（AMJ）社長。近著に『2次会は出るな！』（フォレスト出版）。「ももい・かずま」1962年生まれ。フォトジャーナリスト。世界140カ国を取材し、現代文明を表現する。第32回太陽賞受賞。



かつての面影を残していた80年代上海（P5）。中国の都市は要塞の機能も兼ね備えていた。今も無数の地下トンネルが残る（P6）